

# 1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和5年8月)

野菜振興部 調査情報部

## 【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万988トン、前年同月比98.2%、価格は1キログラム当たり272円、同104.9%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万8391トン、前年同月比100.4%、価格は1キログラム当たり240円、同103.9%となった。
- 8月の高温・干ばつにより、品目によっては11月頃に豊作になることが予想されるが、果菜類は高温障害により9～10月の回復は望めない。西南暖地産も促成物は遅れると予想される。引き続き市場間の引き合いが強まり、10月は平年を上回る価格水準が予想される。

## (1) 気象概況

上旬は、北・東日本を中心に太平洋高気圧に覆われやすく、晴れた時期があったため、旬降水量は東日本日本海側で少なく、北日本太平洋側では平年並だった。南西諸島付近を通過し九州の西を北上した台風第6号や、東・西日本太平洋側を中心に暖かく湿った空気が流れ込みやすかった影響で、東・西日本と沖縄・奄美で曇りや雨となり、記録的な大雨となる所があった。このため、旬降水量は北・西日本日本海側と東・西日本太平洋側で多かった。旬間日照時間は、北日本太平洋側と東日本日本海側で多く、北・西日本日本海側と東日本太平洋側では平年並だった。また西日本太平洋側で少なかった。北日本を中心に暖かい空気に覆われやすく、また南から暖かい空気が流れ込みやすかったため、旬平均気温は北・東・西日本でかなり高かった。

中旬は、15日に和歌山県に上陸した台風第7号の影響で、大量の暖かく湿った空気が流れ込んだため、東・西日本を中心に記録的な大雨となった所があり、旬降水量は北・東・西日本太平洋側で多かった。15日には鳥取県で大雨特別警報が発表されるなど、各地で土砂災害や河川の増水・氾濫、浸水の災害が発生した。一方、期間のはじめや終わりには、太平洋高気圧に覆われ東日本を中心に晴れた日が多かった

め、旬間日照時間は、北・東日本日本海側と東日本太平洋側で多く、北・西日本太平洋側、西日本日本海側では平年並だった。旬降水量は、北・東日本日本海側で少なく、西日本日本海側と沖縄・奄美では平年並だった。旬平均気温は、南から暖かい空気が流れ込みやすく、日本海側ではフェーン現象も発生したため、北・東日本でかなり高く、西日本で高かった。特に、北日本の旬平均気温平年差は+3.1℃となり、1946年の統計開始以降、8月中旬として1位の高温となった。

下旬は、北・東日本を中心に太平洋高気圧に覆われて晴れた日が多かったため、旬降水量は、北日本太平洋側でかなり少なく、北・東・西日本日本海側で少なかった。東日本太平洋側では平年並だった。湿った空気の影響を受けた西日本太平洋側の旬降水量は多かった。また、旬間日照時間は、北・東日本日本海側と北日本太平洋側でかなり多く、東日本太平洋側と西日本日本海側で多かった。西日本太平洋側では平年並だった。特に、北日本日本海側の旬間日照時間平年比は158%となり、1961年の統計開始以降、8月下旬として1位の多照となった。南から暖かい空気が流れ込みやすく、日本海側ではフェーン現象も発生したため、旬平均気温は北・東日本でかなり高く、西日本で高かった。旬平均気温平年差は、北日本で+5.3℃、東日本で+

2.6℃となり、1946年の統計開始以降、8月下旬として北日本で1位、東日本で1位タイの

高温となった。旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り（図1）。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	
東日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側		
西日本					日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側

資料：気象庁「8月の天候」

1 平年を上回る水準			
2 平年並み			
3 平年を下回る水準			

## (2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、

入荷量は11万988トン、前年同月比98.2%、価格は1キログラム当たり272円、同104.9%となった（表1）。

表1 東京都中央卸売市場の動向（8月速報）

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg) の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	110,988	98.2	93.3	272	104.9	101.7	268	266	280
だいこん	6,222	91.6	81.8	109	79.1	98.5	94	112	119
にんじん	5,060	89.2	77.4	153	105.6	116.7	143	148	164
はくさい	6,070	96.7	90.4	83	140.1	81.0	82	96	75
キャベツ類	16,052	95.0	96.3	78	114.3	77.8	82	85	71
ほうれんそう	595	92.6	91.2	888	104.4	106.3	809	793	993
ねぎ	3,471	103.5	92.5	360	89.4	105.5	295	405	389
レタス類	9,454	96.3	103.1	151	105.2	84.5	140	153	160
きゅうり	8,061	104.3	100.0	317	112.3	98.5	284	286	372
なす	3,762	101.9	98.6	322	114.6	98.3	295	318	349
トマト	8,406	113.2	102.1	347	86.5	101.0	336	306	391
ピーマン	2,205	98.3	97.5	474	119.0	114.0	467	500	459
さといも	268	90.3	79.8	415	111.4	105.4	449	468	384
ばれいしょ	5,382	117.2	96.2	153	108.2	107.1	176	154	137
たまねぎ	8,886	97.8	91.3	111	81.1	100.7	122	111	103

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、数量減少から堅調な動きとなり、高めに推移した前年をやや上回り、平年を1割以上上回った（図2）。

葉茎菜類は、レタスの価格が、業務需要の回復などから月間を通して安定した動きとなり、安めに推移した前年をやや上回り、平年を1割以上上回った（図3）。

果菜類は、ピーマンの価格が、月間を通して堅調な推移となり、安めに推移した前年を2割近く上回り、平年を1割以上上回った（図4）。

土物類は、たまねぎの価格が、高めに推移した前年を2割近く下回り、平年をわずかに上回った（図5）。

なお、品目別の詳細については表2のとおり。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

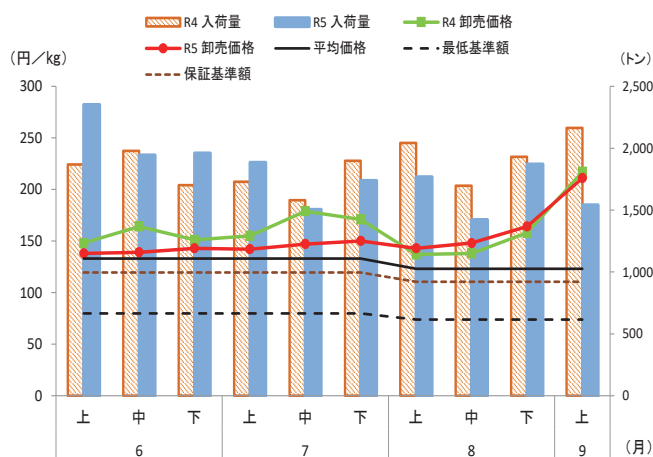


図3 レタスの入荷量と卸売価格の推移

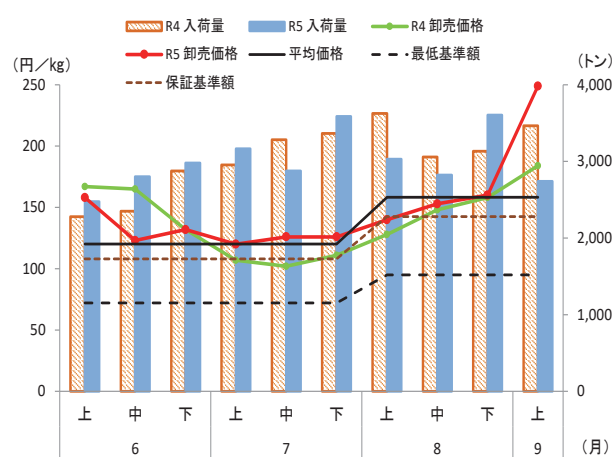


図4 ピーマンの入荷量と卸売価格の推移

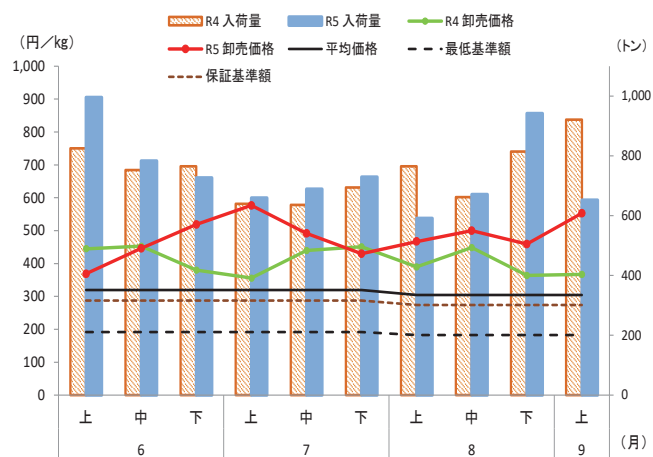
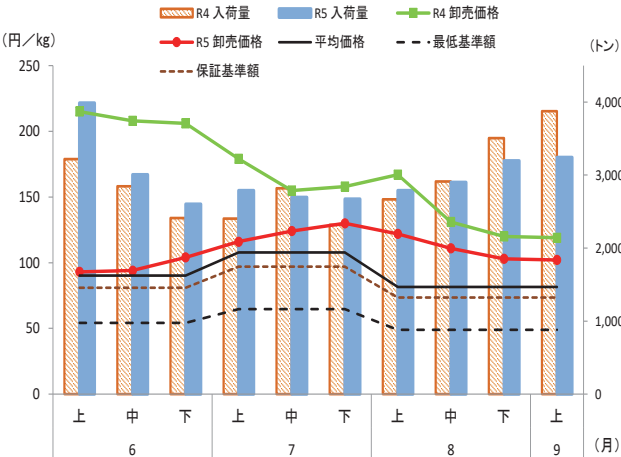


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移







資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	8月の入荷量・価格の動向
根菜類	 だいこん	北海道産を中心に青森産の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、気温が高く推移したことから生育は順調でやや前進傾向であったが、干ばつ傾向と高温障害により収量は減少している地域が多い。青森産の作付面積は前年並みだが、全体的に高温障害の影響を受けて収量が伸び悩んでおり、病害も散見され品質不良も多い。総入荷は少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。 価格は中旬以降上がったものの、高めに推移した前年を2割強下回り、平年をわずかに下回った。
	 にんじん	北海道産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、播種期の干ばつ傾向からその後の降雨により回復するも、さらにその後の低温と日照不足の影響により生育は停滞した。その後は全体的に高温、干ばつ傾向となり、細物傾向で品質不良も多いことから数量は伸び悩んだ。総入荷量は少なめに推移した前年を1割強下回り、平年を2割以上下回った。 価格は、数量減少から堅調な動きとなり、高めに推移した前年をやや上回り、平年を1割以上上回った。
葉茎菜類	 はくさい	長野産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、好天に恵まれたものの降雨は局地的なものが多く、全体的に高温・干ばつ傾向で、品質不良も散見された。総入荷量は少なめに推移した前年をやや下回り、平年を1割弱下回った。 価格は、大幅な安値で推移した前年を4割強上回り、平年を2割近く下回った。
	 キャベツ類	群馬産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、好天に恵まれたものの、全体的に干ばつ傾向であった。盆以降の局地的な多雨により、品質低下が散見され、病害も散見される。総入荷量は前年、平年ともやや下回った。 価格は、大幅な安値で推移した前年を1割以上上回り、平年を2割以上下回った。
	 ほうれんそう	群馬産、栃木産中心の入荷となった。群馬産の作付面積は前年をやや下回り、高冷地を中心に高温・干ばつの影響により生育が停滞し、圃場での品質低下も見られた。栃木産の作付面積は前年並みで、高冷地を中心に天候には恵まれたものの、高温と局地的な多雨により棚持ちが悪く、品質不良が散見された。総入荷量は6月の豪雨の影響を受けた産地の数量減が著しく、前年をかなりの程度下回り、平年を1割近く下回った。 価格は、絶対量不足と品質の格差が顕著に現れた下旬に向けて上がり、前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。
	 ねぎ	茨城産を中心に秋田産、北海道産、青森産などの入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、高温と多雨により生育は前進し、病虫害が散見されている。秋田産の作付面積は前年並みで、5月の低温によりやや生育が停滞したものの、その後の降雨と好天に恵まれ回復した。北海道産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であったが、干ばつの影響により生育にばらつきが見られた。青森産の作付面積は前年並みで、おおむね順調であったが、高温・干ばつの影響により細物傾向であった。全体的に遅れなど生育にばらつきが見られ、棚持ちも悪い傾向であった。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年をかなりの程度下回った。 高温と品質のばらつきが顕著であったことなどから、中旬以降、絶対量不足により価格を上げ、高めに推移した前年を1割強下回り、平年をやや上回った。
	 レタス類	長野産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、気温、天候には恵まれたものの、降雨は局所的なものも多く全体に干ばつ傾向で、圃場での品質の差も散見された。棚持ちの悪さも顕著にみられた。総入荷量は多かった前年をやや下回り、平年をやや上回った。 価格は業務需要の回復などから月間を通して安定した動きとなり、安めに推移した前年をやや上回り、平年を1割以上下回った。
果菜類	 きゅうり	福島産を中心に岩手産、秋田産など東北産の入荷があった。福島産の作付面積は前年並みで、干ばつ傾向からの定期的な降雨により生育はおおむね順調であった。急激な気温上昇による生理障害が散見された。岩手産の作付面積は前年並みで、天候の被害は少なく順調に推移した。秋田産の作付面積は前年並みで、低温による活着遅れなどが散見されるも、その後の好天により前年並みまで回復した。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年並みとなった。 価格は安めに推移した前年を1割以上上回り、平年をわずかに下回った。
	 なす	群馬産を中心に栃木産、茨城産などの関東産の入荷があった。群馬産の作付面積は前年並みで、おおむね順調も高温・干ばつの影響により樹勢の低下が散見された。栃木産の作付面積は前年をやや下回り、生育はおおむね順調であった。茨城産の作付面積は前年をやや下回り、前進傾向に加え樹勢の低下が早いことから漸減傾向となった。総入荷量は前年をわずかに上回り、平年をわずかに下回った。 関東産の入荷がピークを越え、盆以降落ち着きを見せたことから、下旬に価格を上げ、安かった前年を1割以上上回り、平年をわずかに下回った。
	 トマト	北海道産を中心に福島産、青森産などの入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれて生育はおおむね順調で前進傾向であったが、高温の影響による軟化、割れが多発した。色回しも早く小玉傾向となった。福島産の作付面積は前年をやや下回り、生育はおおむね順調でやや前進するも高温により小玉傾向となった。花落ちや着果不良も散見された。青森産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調で前進傾向であったが、高温の影響により小玉傾向であった。樹勢の低下も早く、収穫後、選果後の割れも多発しており、廃棄も多い。総入荷量は少なめに推移した前年を1割以上上回り、平年をわずかに上回った。 価格は高めに推移した前年を1割以上下回り、平年をわずかに上回った。



	 ピーマン	<p>岩手産を中心に茨城産、福島産の入荷となった。岩手産の作付面積は前年並みで、生育は順調であったが高温・干ばつの影響により尻腐れ（果実の先端の傷み）が散見された。茨城産の作付けは前年並みで、生育はおおむね順調も病害の発生が散見された。福島産の作付面積は前年をやや下回り、生育期の気温が高めに推移したことから順調であったが、高温障害が散見された。総入荷量は前年、平年ともわずかに下回った。</p> <p>価格は月間を通して堅調な推移となり、安めに推移した前年を2割近く上回り、平年を1割以上上回った。</p>
土物類	 さといも	<p>千葉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、降雨が少なく、ほかの作物の作業ができなかった影響もあり、収穫が順調に進んだ。総入荷量は少なかった前年を1割弱下回り、平年を2割強下回った。</p> <p>価格はやや安めに推移した前年を1割以上上回り、平年をやや上回った。</p>
	 ばれいしょ	<p>北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、生育は前進傾向となるも、高温・干ばつの影響により小玉傾向で、品質低下もみられた。総入荷量は少なかった前年を2割近く上回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、北海道産の出回りに伴い下旬に向け落ち着きを見せたものの、前年、平年ともかなりの程度上回った。</p>
	 たまねぎ	<p>北海道産を中心に兵庫産などの入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで生育はやや前進傾向も、高温・干ばつの影響により小玉傾向であった。品質もばらつきが多く棚持ちが懸念される。兵庫産の作付面積は前年並みで、平年より降雨が多く大玉傾向となった。出荷は上旬までにはほぼ切り上がった。中国産の輸入は前年を2割以上下回る。総入荷量は少なかった前年をわずかに下回り、平年を1割近く下回った。</p> <p>価格は高めに推移した前年を2割近く下回り、平年をわずかに上回った。</p>

（執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実）

### （3）大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万8391トン、前年同月比

100.4%、価格は1キログラム当たり240円、同103.9%となった。（表3）。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向（8月速報）

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg) の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	38,391	100.4	97.7	240	103.9	100.6	244	240	236
だいこん	2,407	92.5	81.7	107	81.1	99.0	92	110	118
にんじん	2,304	99.9	94.6	152	107.8	120.7	137	145	167
はくさい	2,758	90.3	100.7	88	144.3	85.2	85	108	80
キャベツ類	6,638	104.1	111.1	76	111.8	78.1	84	86	66
ほうれんそう	248	90.3	79.9	889	102.5	103.4	825	877	962
ねぎ	637	104.8	100.6	520	104.4	103.9	458	584	535
レタス類	2,050	100.3	89.6	155	102.6	89.2	139	164	164
きゅうり	2,027	98.5	106.5	364	131.9	109.2	309	351	423
なす	956	89.5	94.0	340	130.3	109.7	322	335	360
トマト	3,099	105.0	108.3	345	91.3	101.3	329	296	395
ピーマン	711	113.5	101.2	447	117.0	112.9	418	473	456
さといも	37	68.4	55.7	431	133.9	121.3	469	547	367
ばれいしょ	2,159	99.6	83.7	148	94.9	98.5	164	143	138
たまねぎ	4,844	123.6	104.6	106	69.7	95.8	114	107	99

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	8月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>北海道産が中心となり、青森産や岐阜産も主体となる入荷であった。北日本で前線が停滞し、曇りや雨が多く、記録的な大雨が降った地域もあった一方で、気温が高い日が多く、観測史上最も気温の高い状況が続くなど、天候不順の影響により品質低下が目立ち、産地廃棄などもあったことで、入荷量は北海道産は前年の半分以下となった。青森産や岐阜産は補てんのために入荷増となったが、月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>品質低下品が多く見られたことで価格は伸びず、北海道産は上旬の価格が前年を大きく下回り、旬を追うごとに回復傾向となるも、月間でも前年をかなり下回った。他産地も不足感がある中でも単価安の影響を受けて伸び悩み、月間全体では前年を大幅に下回り、平年をわずかに下回った。</p>
	にんじん 	<p>北海道産が中心となる入荷であった。記録的な気温高の日が多く、品質低下品が多く見受けられた。入荷量は伸び悩み、月間では前年並みで、平年をやや下回った。</p> <p>品薄感から価格は旬を追うごとに上伸を続けた。月間では前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に上回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>長野産が中心となる入荷であった。上旬は干ばつの影響により生育不良となり、産地出荷量が少なく入荷量も前年を大幅に下回った。中旬以降は台風の影響による降雨があり、生育が回復傾向となった。下旬には前年並みまで回復したが、月間では前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>価格は不足感から中旬に高騰したが、入荷増に伴い下旬には再び下落した。月間では極端な安値だった前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく下回った。</p>
	キャベツ類 	<p>群馬産を中心に主力の長野産も主体となる入荷であった。両産地とも上旬は干ばつにより生育不良となり、小玉傾向で上中旬の産地出荷量が少なかった。盆明け以降は降雨があったことで下旬には回復傾向となったが、月間全体では前年をやや上回り、平年をかなり大きく上回った。</p> <p>価格は、上中旬は不足感から前年を大幅に上回る推移となったが、下旬の入荷増に伴い下落し、月間全体では安値だった前年をかなり大きく上回り、平年を大幅に下回った。</p>
	ほうれんそう 	<p>岐阜産が中心となる入荷であった。記録的な気温高の影響により各地とも生育不良となり、産地出荷量が少なく入荷減量となった。特に中旬頃には台風の影響により記録的な大雨となったところもあり、入荷量が激減した。月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は不足感から旬を追うごとに上伸を続けた。月間では前年をわずかに上回り、平年をやや上回った。</p>
	ねぎ（白ねぎ） 	<p>長野産を中心に北海道産や鳥取産、茨城産などが主体となる入荷であった。長野産の上中旬は干ばつの影響により入荷量が伸び悩んだが、盆以降に降雨があったことにより生育が回復し、下旬には急増して前年を大きく上回り、月間でも前年を大幅に上回る入荷量となった。他産地も生育は良く順調な出荷であったが、各地とも記録的な気温高の影響により入荷量は伸び悩んだ。月間全体では前年をかなり上回った。</p> <p>価格は猛暑日が続くなど記録的な気温高で消費が鈍く、全旬とも伸び悩んだ。月間では前年を下回った。</p>
	ねぎ（青ねぎ） 	<p>徳島産と香川産が主体となり、高知産や静岡産などの入荷もあった。記録的な気温高の影響により生育不良となり、加えて台風の被害もあり中旬に入荷量が減少した。下旬には回復傾向となったが、月間全体では前年を下回った。</p> <p>価格は不足感から高値推移となり、旬を追うごとに上伸を続けた。安値だった前年を大きく上回った。</p>
レタス類 	<p>玉レタスは長野産の入荷であった。全旬とも順調な入荷が続き、月間でも前年をかなり上回った。サニーレタスも長野産の入荷で、全旬とも順調な出荷を続け、量販店の引き合いも強かったことから入荷増となり、月間では前年を大幅に上回った。リーフレタスも長野産を中心とする入荷で、記録的な気温高の影響により生育が悪く、産地出荷量が少なく入荷量は全旬とも伸び悩んだ。月間では前年を下回った。レタス類全体では前年並みで、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>玉レタスは量販店での動きが鈍く販売に苦戦し、価格は伸び悩んだ。サニーレタスは入荷量が多い中でも引き合いが強く、高値を維持した。リーフレタスは不足感から高値推移となり、月間でも前年をかなり上回った。レタス類全体では前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度下回った。</p>	

果菜類	きゅうり 	<p>福島産を中心として、長野産などの入荷もあった。各地とも記録的な気温高の影響により生育が悪く、産地出荷量が少なく入荷量は伸び悩んだ。下旬に回復傾向がみられたが、月間全体では前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>価格は、不足感から高値推移となる中で、気温高により需要が高く量販店からの引き合いも強かったため、旬を追うごとに高騰を続けた。月間では前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	なす 	<p>千両系は群馬産と京都産が主体となり、長なす系は愛媛産を中心に茨城産などの入荷もあった。記録的な気温高の影響により各産地とも生育が悪く、産地出荷量が少ない中で入荷量は全旬とも伸び悩んだ。月間全体では前年、平年ともかなりの程度下回った。</p> <p>量販店での特売が組まれるなど引き合いが強くなり、価格は不足感から高騰し、旬を追うごとに上昇を続けた。月間全体では前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	トマト 	<p>岐阜産が主体となる入荷に、愛媛産、岡山産、熊本産などの入荷もあった。各地とも生育は良好で前進出荷気味であったが、月の前半は記録的な気温高の影響、中旬頃には台風と大雨により、入荷が減少した。下旬には回復となり月間全体では前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。</p> <p>価格は、盆の台風の影響により中旬に下落したが、下旬には回復し、月間では前年をかなりの程度下回り、平年をわずかに上回った。</p>
	ピーマン 	<p>茨城産、愛媛産、宮崎産が主体となる入荷であった。入荷量は潤沢で旬を追うごとに増量傾向となった。月間全体でも前年をかなり大きく上回り、平年をわずかに上回った。</p> <p>潤沢な入荷の中でも記録的な気温高の影響により品質低下品が多く、また引き合いが強かったことにより高値推移となった。月間では前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく上回った。</p>
土物類	さといも 	<p>宮崎産の入荷であったが、月の前半は線状降水帯が停滞して長雨となり、盆前には台風が接近、産地での収穫や出荷の作業にも影響して入荷量は極端に少なく、盆需要の対応に苦戦を強いられた。月間では前年、平年とも大幅に下回った。</p> <p>価格は、不足感と盆需要のため上中旬は高値推移となったが、下旬には高値疲れから下落した。月間では前年、平年ともに大幅に上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>丸芋は北海道産を中心とする入荷であった。潤沢な入荷で旬を追うごとに入荷増となったが、大玉が少なくLサイズが中心となった。メイクインも北海道産を中心とする入荷で、大雨の影響で極端に入荷量が少なかった前年を全旬とも大きく上回った。旬を追うごとに入荷増となり、月間でも前年を大幅に上回った。ばれいしょ全体では前年をわずかに下回り、平年を大幅に回った。</p> <p>丸芋の価格は、入荷増に伴って旬を追うごとに下落傾向となったが、月間では前年をやや上回るにとどまった。メイクインは大玉が少なく、L・LMサイズが中心となり、価格は旬を追うごとに下落し、月間でも前年を下回った。ばれいしょ全体でも旬を追うごとに下落し、月間では前年をやや下回り、平年をわずかに下回った。</p>
	たまねぎ 	<p>兵庫産を中心として北海道産の入荷も始まった。兵庫産は前進出荷で入荷量が少なかった前年を、全旬とも大きく上回った。台風の影響により中旬の入荷量は減少したが、月間では前年の2倍以上の入荷量となった。北海道産は曇天や降雨の影響により上中旬の入荷量が少なく、下旬から順調となったが、月間では前年をかなり下回った。月間全体では前年を大幅に上回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は、極端な高値だった前年を大幅に下回り、平年をやや下回った。</p>

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

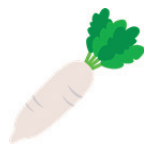


#### (4) 首都圏の需要を中心とした10月の見通し

本州・北海道を中心に8月いっぱい高温・干ばつが長く続いた。台風の接近や線状降水帯の発生もあったが、全般に雨不足が報告されている。9月初旬に平年並みの天候に戻れば、今後本格化する秋冬野菜は正常な生育を保つと予想される。北海道産・東北産の夏野菜は、9月初旬に降雨があったとしても回復しきれないと予想される。

一般的に「干ばつに不作無し」と言われるが、品目によっては11月頃に豊作になることが予想される。全国の野菜産地はほぼ灌水設備が整っており肥培管理が行き届いているが、果菜類は高温障害により9～10月の回復は望めない。西南暖地産も促成物は遅れると予想される。

引き続き市場間の引き合いが強まり、10月は平年を上回る価格水準が予想される。



#### 根菜類

だいこんは、北海道産（ようてい）は、現状までの出荷実績は例年の3分の2かそれ以下となっている。例年のない暑さによって、細物や病気の発生などがあり少なくなっている。最終出荷は10月中旬を予想しているが、回復は難しいと予想される。青森産は例年のない気温の高さにより、圃場での廃棄が多くなっている。収穫後の洗いの段階で虫害や腐れが見つかるなど、出荷は伸びていない。今後降雨があれば9月中旬から回復し、10月出荷物から平年並みに回復すると予想される。通常は9～10月をピークに11月中旬までの出荷となる。

にんじんは、北海道産の現状は出荷のピークが続いている。高温の影響で地上部が弱ったことにより、全体的に小振りで収量が下がっている。10月いっぱい切り上がると予想され、生産量は例年の80～90%と予想している。青森産の秋にんじんは10月下旬から11月上中旬をピークに、11月いっぱい計画している。播種は終わっており、高温下である程度の発芽不良が予想される。機械播きを主力に、一部シーダーテープ（種子の入った紐）での播種を行っており、作付面積は増えている。



#### 葉茎菜類

キャベツは、群馬産の現状はほぼ平年並み、前年並みの出荷が続いている。6玉サイズ中心で、大きさも特に問題ない。9月も引き続き例年どおりピークが続き、10月中旬に減ると予想される。岩手産の現状も平年並みの出荷となっており、高温・干ばつでも収量は減っていない。9月いっぱい現状のペースが続き、10月には減ってきて中旬で切り上がる見込みである。

はくさいは、長野産の現状は、厳しい干ばつが続いているが生育は順調である。9月に入りやや小さめのサイズとなって出荷は平年を下回ると予想される。中旬から回復して10月には平年並みとなり、11月中旬には切り上がると予想される。

ほうれんそうは、群馬産（利根沼田）の現状は高温・干ばつにより単収は減っているが、例年と同様9月に入り出荷が増えてきて、10月も例年並みの出荷を予想している。露地物も9月下旬に始まってくるが、高温下の播種であったことから、遅れや品質への影響が心配される。群馬産（藪塚）の現状も出荷は続いているが例年より少なめである。伸びが緩慢であったり、発芽不良も見られるなど苦戦している。10月に入るとこまつなの作業が終了してほうれんそうに注力するため出荷が増えると予想される。露地物も始まり、作付けの微増もあって前年並みに追いついてくると予想される。

ねぎは、茨城産は秋冬ねぎとなり、出荷量は8～9月よりも減ってくるが前年並みと予想される。高温下ではあるが、生育には問題ない。新潟産は9月に入ると稲刈りが始まり、10月初め頃まで水田作業に注力するため、ねぎの出荷は10月中旬から本格化すると予想される。猛暑が続いて雨が少ないことにより、肥大が悪く細物が多くなると予想している。11月に入ってピークを迎え、12月の積雪の頃に切り上がると予想される。青森産は高温の影響により伸び、肥大ともに悪く、今のところ平年の半分程度の出荷となっている。9月の稲刈り後、9月下旬から12月が出荷のピークだが、例年の



80%程度と予想される。

レタスは、長野産の出荷は準高冷地からとなり、今後増えて最後の最盛期を迎えると予想される。高温・干ばつが続いていることから、葉の「焼け」の発生が心配される。現状は灌水作業をまめに行い、発生を防いでいる。9～10月も作業が順調で、<sup>かんすい</sup>平年並みの出荷を予想している。兵庫産は例年どおり、早い物は9月下旬から10月初め頃には出荷が始まり、本格的に増えてくるのは11月に入ってからと予想される。年内のピークは11月下旬と予想される。作付けはやや減少する見込みである。群馬産の現状は、例年同様、出荷が減ってきている。9月上旬に降雨があれば、9～10月と盛り返してくると予想される。10月いっぱいまでの出荷であるが、例年より少なくなると予想している。茨城産は例年同様9月25日頃から始まり、播種作業も順調であったことから、10～11月がピークと予想される。定植後も灌水を怠ることなく、10月も平年並みの出荷と予想される。

## 果菜類



きゅうりは、群馬産は抑制物となり、盆前に定植した物が9月15日から、盆明けに定植した物は10月10日～15日頃にピークとなると予想される。猛暑ではあるが、十分な日射量で例年通り順調に入荷すると予想される。異例の暑さにより、その後急な長雨となれば、生育に問題が出てくることも予想される。高知産の現状は出荷が始まっているが、主力シーズンの物はこれからが定植であり、10月末頃から量的にまとまってくると予想される。最初のピークは12月始め頃と予想している。福島産の露地物は9月いっぱいではほぼ切り上がると予想される。抑制物は現状始まっているが、下位等級品がやや多い。10月がピークで、11月上旬までの出荷と予想される。

なすは、高知産の出荷は9月末頃から始まり、10月中下旬から11月いっぱいくらいまでが年内のピークと予想される。定植作業も順調に始まっており、特に遅れは見られない。高温下であったが、単為結果品種（受粉しなくても果実

が肥大する品種）に切り替えているため結実に心配はない。栃木産は盆前後に出荷のピークとなり、現状は成り疲れと猛暑により花落ちしたことから出荷は少なめである。これまでの出荷実績は作付面積の減少もあり92～93%と前年を下回っているが、不作年ではない。まとまって多く出荷されるのは9月上旬までで、10月は例年同様に減って、霜が降りる11月中下旬に切り上がると予想される。福岡産は9月1日から始まり、現状異常気象などの影響はない。10月の出荷は増加傾向で推移し、11月が年内のピークと予想している。品種は「PC筑陽」であり例年と変わらない。

トマトは、熊本産の選果の開始が10月1日で、全国に出荷が広がるのは中旬以降と予想している。生育そのものは順調であるが、大玉の生産が若干減ってミニトマトの作付けが増えている。大玉品種は「桃太郎」のほか「かれん」、ミニトマトは「小鈴」である。茨城産の抑制物の茎は伸びているが着果は少ない。出荷は11月いっぱい降霜の時期までと予想される。例年は9～10月がピークであるが、8月末の段階では出荷は伸びてきていない。10月に回復しても、やや小ぶりな仕上りと予想される。群馬産の高原産地の夏秋物は、現状までで前年の110%以上の出荷実績である。猛暑もあり前倒し気味であったが、8月下旬に入って減ってきた。8月末にはやや増えたが、作付けが前年並みであることから、全体の生産量は前年並みと予想している。そのため9～10月は前年を下回ると予想される。品種は「りんか」がほとんどで、M・Sサイズが中心と見込まれる。青森産は8月末の段階では例年と同様減ってきているが、出荷量は例年の60～70%と少ない。暑さによる着果不良で今後の回復は期待できず、切り上がりは例年と同様の11月上旬と予想される。愛知産は例年と同様9月下旬から始まり、11月20日前後からピークを迎えると予想している。作付けはほぼ前年並みで、品種は「桃太郎」のほか「りんか」も増えている。

ミニトマトは、北海道産の出荷は全体的に前倒し傾向だが、8月末の出荷実績は前年比100%である。北海道でも夏日が30日以上続いたことなどから着果不良で、今後も大きなピークはなく10月いっぱい出荷は続くが、例年

をかなり下回ると予想される。

ピーマンは、茨城産の現状は抑制物の秋ピーマンで、猛暑により「焼け」の発生はあるものの平年並みの出荷となっている。ピークは9月下旬から10月までで、出荷は霜が降りる11月上旬まで。温室物は10月下旬以降出荷が始まるが、燃油価格の高騰により作付けは減少すると予想している。岩手産の露地物は高温・干ばつにより果実の尻腐れ(果実の先端部分の傷み)が発生するなど、現状は圃場での廃棄が増えている。梅雨明け後の降雨はなく、8月の盆頃によく降雨があり下旬の出荷は増えた。9～10月は、今後の降雨次第では平年並みまで回復すると予想される。11月上旬までの出荷であるが、切り上がりのタイミングは降霜次第でもある。福島産は暑さの影響により尻腐れがやや見られ、現状はやや減少傾向となっている。例年より早めの10月には切り上がると予想され、10月としてはやや少なめと予想している。

## 土物類



さといもは、埼玉産は高温による被害はなく、例年どおり9月上旬から順調に始まると予想される。主要な産地は灌水施設があるため問題ないが、山間地寄りの産地には設備がなく、やや小ぶりの仕上がりで予想される。作付面積は前年並みである。宮崎産の産地(小林市)の夏は、雨が多く日照が少なかった。現状は「石川」品種のピークで9月中旬までと予想される。10月に入って出荷される「土垂」は年明け1月頃までと予想される。「筍芋」は12月と予想される。現状では各品種ともに平年作で、作付けも例年並みである。愛媛産は「女早生」の出荷が例年より3～4日遅く始まった。翌4月までの計画であるが、今のところ玉付きがやや悪くやや不作気味と予想している。当面の出荷のピークは12月であり、年内の出荷量は前年並みで、作付けも前年並みである。

ばれいしょは、北海道産(今金町)の「男爵」の現状は早出し物が70%終わったところで、秋物は9月8日から出荷が開始すると予想される。例年より若干早めで、現在のところ玉付きは良く豊作を予想している。雨不足からそうか

病(いもの表面にかさぶたのような斑が出る病気が散見される。北海道産(留寿都)の「キタアカリ」は干ばつの影響により収穫作業が7～10日遅れている(土が乾燥しているため収穫時に傷が付いてしまうため)。生育は問題なく、出荷は翌4月までと予想される。

たまねぎは、北海道産は圃場によりばらつきがあるが、特に天候の影響はなく、平年作を予想している。9月から11月がいったんのピークであり、サイズはLが中心と予想される。



## その他

ブロッコリーは、長野産の秋ブロッコリーは9月中旬頃から増えて、11月いっぱいくらいまでと予想される。暑い時期に定植したが、平年並みに推移しており、ピークは9月末頃から10月15日頃と予想される。埼玉産は9月下旬から10月上旬にかけて始まるが、早く定植した苗が特にダメージを受けており、後作の品種に切り替えたため面積の減少はない。出荷の始まりの時期は少なめと予想され、11～12月には回復してピークとなると予想される。青森産は9月に入って出荷が始まり11月上旬までと予想される。雨不足により定植した苗が焼けたため、例年の20～30%少ない出荷と予想している。北海道産の現状はかなり出荷が少なく、9月に入り、花蕾形成の時期に高温・干ばつを避けられれば、やや回復すると予想される。10月中旬までは量的にはまとまるが、下旬には急減して終盤を迎えると予想される。

セルリー(セロリ)は、長野産は10月中旬に露地物からハウス物に切り替わると予想される。現状は遅れ気味で、高温の影響により圃場でのロスが多くなっている。9～10月はほぼ前年並みの出荷と予想される。

かぼちゃは、北海道産の現状は出荷が始まっており、10月末までと予想される。着果は良かったが、高温・干ばつにより日焼けやうどんこ病、降雨による浸水被害があるなど、平年を下回る出荷となっている。品種は「味平」などで、6玉・7玉サイズ中心である。

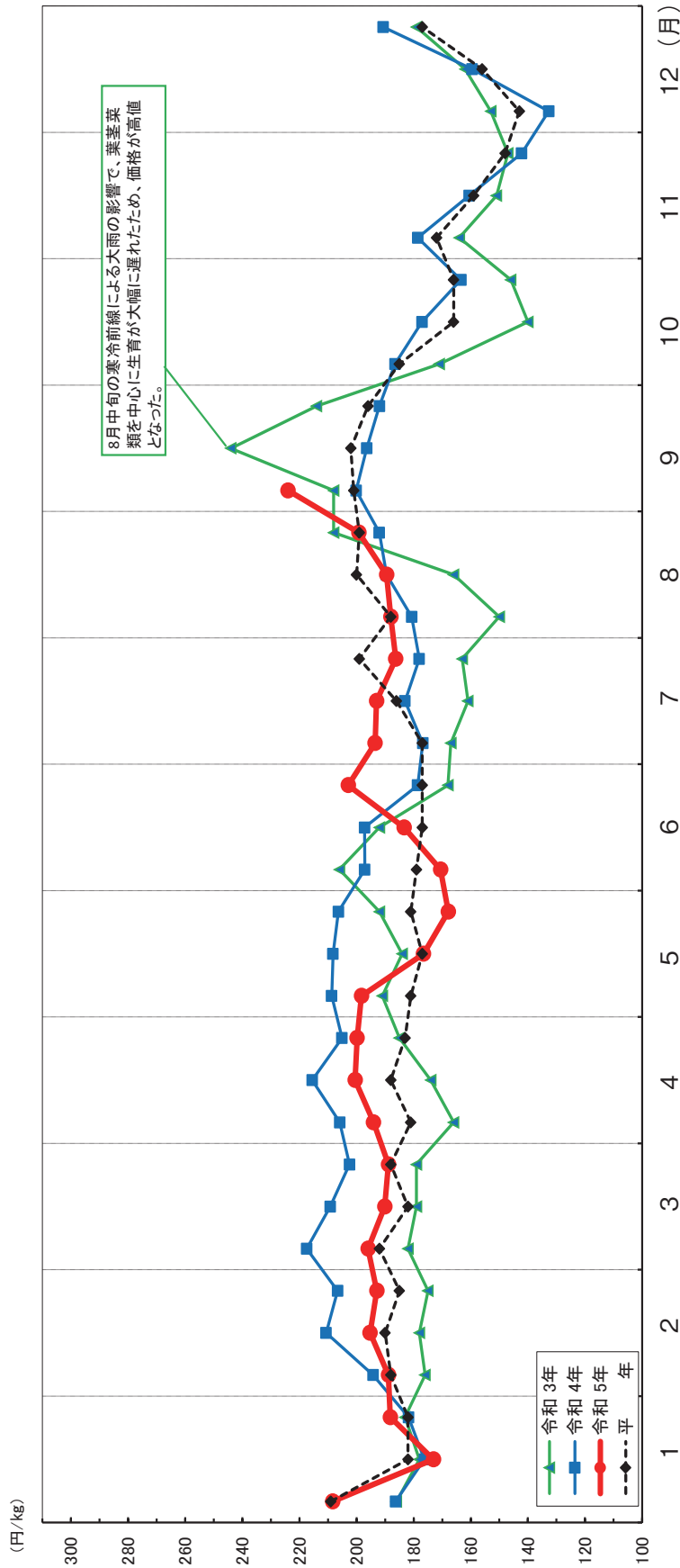
ごぼうは、九州産は台風の影響により品質が悪かった。青森産の新物は気温高により生育は

順調で、例年になく早い展開で8月末から収穫が始まり、品質も良好である。気温高により店舗での鮮度が維持できないことが懸念される。

かんしょは、千葉産の現状は出荷が始まったところであり、猛暑と干ばつの中での生育であったため、果形に乱れが見られる。9月に入り出荷量が増えて当面のピークは9月下旬と予想される。10月には貯蔵作業に注力し、出荷はやや減ってくる。年内の品種は「シルクスイート」「ベニアズマ」と予想される。徳島産は出荷の始めは小振りの物が多かったが、現状は平年並みのサイズとなっている。天候の影響もなく、9～10月はLサイズを中心に順調に出荷されると予想される。

(執筆者：千葉県立農業大学校  
講師 加藤 宏一)

## (参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月															
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬														
令和3年	186	178	183	176	178	175	182	179	179	166	174	185	191	184	192	206	192	206	192	168	167	161	163	150	166	208	208	244	214	171	140	146	164	151	147	153	162	179
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	181	189	192	200	196	192	200	196	187	177	163	179	161	142	133	160	191
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224													
平年	209	182	182	188	190	185	192	182	188	181	188	183	181	177	181	179	177	177	186	199	188	200	199	201	202	196	185	166	166	172	159	148	143	156	177			

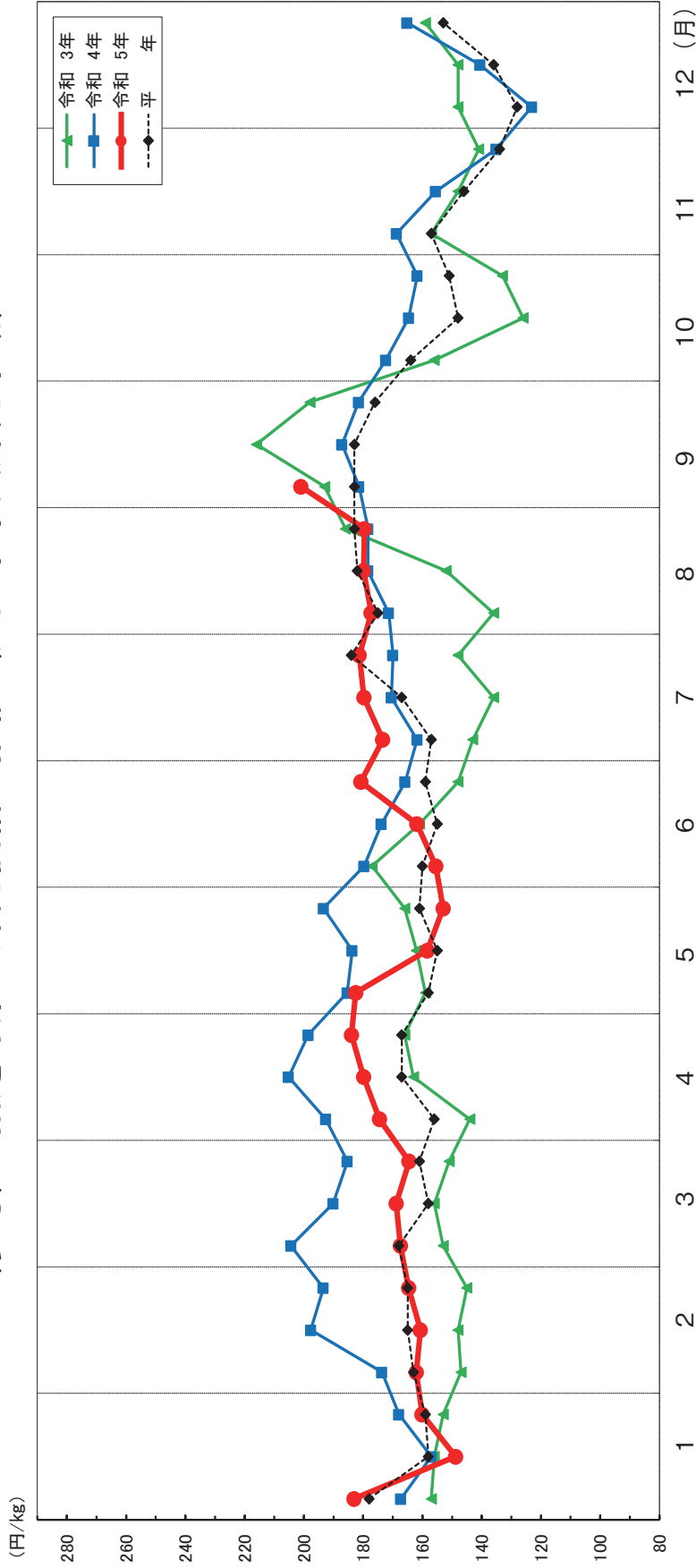
資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（平成30年～令和4年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。



## (参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬												
令和3年	157	156	153	147	148	145	153	156	151	144	163	166	177	161	148	143	136	148	136	152	186	193	216	198	156	126	133	157	148	141	148	148	159			
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	201											
平 年	178	158	159	163	165	165	168	158	161	156	167	167	158	155	161	160	155	159	157	167	184	175	182	183	183	176	164	148	151	157	146	134	128	136	153	

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（平成30年～令和4年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。